

# 篠崎

# 二郎



1910年（明治43）3月2日生。  
奈良県出身。  
同志社大学予科を経て、31年（昭和6）、同文学部英文学科進学。  
35年卒業。新聞記者記者を希望するが果たせず、大阪市立東第二商業学校の英語科の教員となる。  
37年2月、結婚。  
37年11月、大阪通信局通信講習所英語科教官となる。  
38年4月、補充兵として応召、奈良の歩兵第38連隊に入営。  
38年8月、南京の中支派遣軍若松部隊司令部付となり、新聞班に配属。のち警備班に配属。  
40年1月、前線に配置され、討伐戦に参加。  
40年5月、召集解除。  
41年1月、女兒誕生。  
41年8月、再度応召。  
41年9月、平壤の尼崎隊に所属。後、南海派遣軍に属し、東部ニューギニアに転戦。  
44年1月18日、東部ニューギニアにて戦死。  
享年33歳。

## 篠崎寿子宛篠崎二郎軍事郵便書簡 一九三九年二月付

第六十一信

七十四・五倍落手しました。多忙で暫らく文通おくれちゃった。絶へず気になりつゝ、疲れて寝るのて仕方なく...

其後相変わらずの張り切りです。最近情報活発です。

一面復興都市のN市も相変わらず潜入分子活動し、全市は悪化しつゝ、あります。上海のテロ化と相通してゐます。警備司令部だけあって小生との緊張特別です。日直も十一時迄、相当なものです。

当市と相対峙して近効（郊）の守備地区も大討伐をやつてゐます。

江南地区も（全面的に重慶政府の密令らし）活発となりました。今日は不幸なニュースを書かねばならぬ...と云ふのは

武村隊は当市より十五里東方の山中の部落にゐるが、三日二晩の追撃戦に多数の行方不明と戦死を聞ひたが、本部への情報により、

山本大隊だけで八十名近く、中隊だけで二十名と判明、思はず黙突を捧げました。奥ノ坊、坂本、第三機関銃隊等各々相当出してゐます。

今は再起不能に陥つてゐるそうです。お前も朝夕仏前に愛堂を悼んでやつて下さい。今日はそのニュースに哀悼の一日でした。

かくの如くN市を中心に江南地区は旧正を控へ緊張です。敗残兵、土匪、大刀会匪、正規軍、雑軍には閉口です。

近く二次討伐をやつてやう。小生も本部より何かの形で護國の英靈に対してとむらひをやります。日直など情報のある時は

賢明な連絡をとり、措置の対策に歯を食ひしびつゝ、奔走してゐます。（下略）



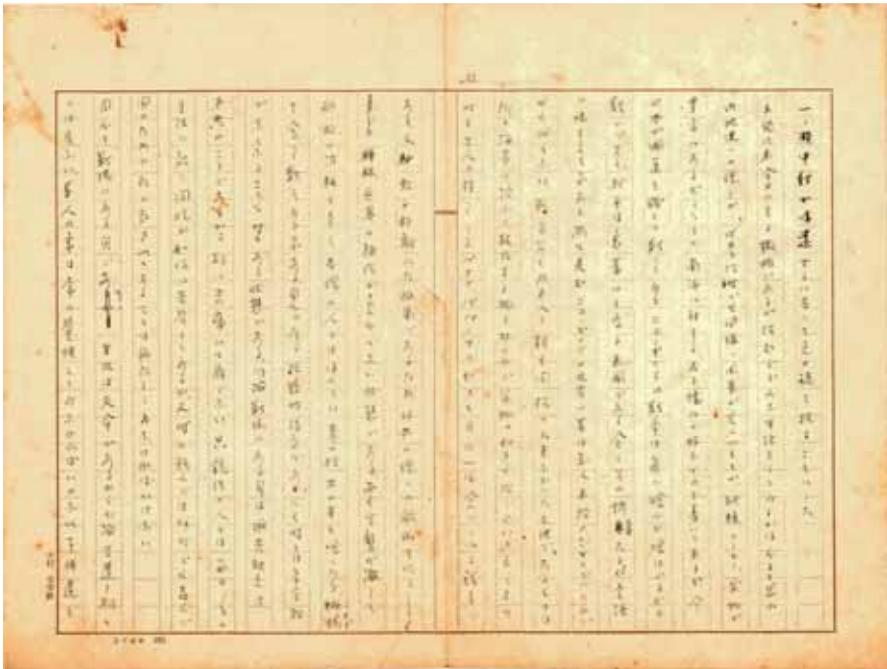
たむら  
まほし  
田村 正



1910年（明治43）12月5日生。  
栃木県出身。  
浦和高等学校を経て、35年（昭和10）東京帝国  
大学医学部卒業。養育院に医師として勤務。  
38年10月15日、高橋嘉代子と結婚。  
39年8月2日、長男誕生。  
40年12月5日、次男誕生。  
41年8月3日、東京帝国大学医学部に博士論文を  
提出。召集により東部第36部隊入營。  
41年9月13日、宇都宮陸軍病院に転属、軍医。  
41年10月1日、見習士官任官。  
43年2月22日、ニューギニアのウェワークに上  
陸。  
43年2月26日、長女誕生。  
43年5月26日、東京帝国大学医学部から博士号  
授与。  
44年12月12日、ニューギニア・ウェワークにて  
戦病死。  
享年35歳。

田村正『ニューギニア日誌』

一ノ瀬中尉が帰還するに当って之の稿を托すことにした。  
出発以来今日に至る概略があるが、何処でどんな生活をしてゐるかは分ると思ふ。  
内地便りの総てが、四季何時でも田畑へ風景が見られるとか、砂糖、コーヒー、果物が  
豊富にあるだらうとか、南洋に対する或る憧れの様なものを書いて来るが、今  
日本が国運を賭して戦つてゐるニューギニアの戦争は真に喰ひか喰はれるかの  
戦ひであり、相手は鬼畜にも劣る米國であり、全くその惨虐たるや言語  
に絶するものがある。而も是処ニューギニアの北岸一帯は前人未踏のジャングルのみで  
田も畑もない。數百年も欧米人と雖も開拓の出来なかつた土地で、あるものは  
所々海岸に沿つて散在する椰子林のみで果物の如きも殆どないと云つてよい。  
時々土人の持つてくるバナナ・パイヤの如きも月に一回食べれる程度で  
ある。又數千軒離れた孤島であるため、日本の総ての船舶を以てしても  
糧秣、兵器の補給が充分でない状態である。而も空襲が激しく  
船舶の消耗も多く、前線の人々はほんとに草の根、木の芽を喰つたり、蜥蜴  
を食つて戦つてゐるのである。自分の居る比較的後方であつても時々々は主食類  
がなくなることも時々ある状態である。勿論戦場にある身は困苦缺乏は  
当然のことであるから、別に苦痛にも感じない。只銃後の人々は毎日く／＼の  
生活に於て同胞が如何に苦勞してゐるか、又時に臨んでは何時でも喜んで  
國のために死に赴きつゝあることは、銘記してゐなければいけない。  
自分も戦場にある身であり、生死は天命であるから勿論生還を期し  
ては居ない。軍人の妻は常に覚悟してゐなければいけない。〔下略〕



# うだ がわ 宇田川 たつ 達



## 宇田川邦子宛宇田川達 親展の遺書

邦子殿、大変御世話になりました。夫として何一つ邦子ちゃんのために出来得なかつたことを申し訳なく思つて居ります。今后、淳のことを御願致します。

邦子ちゃん、私は昭和十七年一月十八日以来邦子ちゃんを喜ぶことなく今日迄過してしまつた。然し、私の気持は決して、世の中の夫たる者に負けぬつもりです。

こうしてペンを走らせて居ると様々の想出が次次に浮んで来ます。今迄何回も云ひましたが、私は邦子ちゃんと結婚して救はれたと確心(信)して居ります。父が亡くなつてからの家庭苦、精神苦、特に色々なことを考へてしまつて当時は私は如何にして生きられるかを懸命に考へてその日(信)を送つたことでせう。然し私は邦子ちゃんによりはつきりと生きべき光を路を与へられたのでした。その故に私は一時でも邦子ちゃんより離れ度くない気持でした。然し

世の中はそれを許してくれませんでした。そして私は祖国の運命を担つて昭和十七年十月一日あの要の日に入隊したのでした。[甲略]

或は邦子ちゃんに淳なかりせば佐藤航空兵大尉の様に愛する妻に此の世に望なければ自決すべしと私も云ひ度い。然し、邦子ちゃんはその世に望なければ自決すべしと私も云ひ度い。然し、邦子ちゃんはその世に望なければ自決すべしと私も云ひ度い。どうか邦子ちゃん、淳を育てて永生

1920年(大正9)4月13日生。  
埼玉県安行村出身。  
32年(昭和7)4月、第2東京市立中学校入学。  
37年3月、第2東京市立中学校卒業。  
37年4月、早稲田大学専門部法律科入学。  
40年3月、早稲田大学専門部法律科卒業。  
40年4月、早稲田大学法学部入学。  
42年1月18日、山田邦子と結婚。  
42年9月、早稲田大学法学部卒業。  
42年10月1日、近衛野砲兵連隊補充隊、陸軍東部第12部隊に入営。  
43年1月20日、長男誕生。  
43年5月10日、第9期甲種幹部候補生として、豊橋陸軍第1予備士官学校に入校。  
43年12月28日、豊橋陸軍第1予備士官学校卒業。  
43年12月28日、防空第6連隊に転属。  
44年6月1日、第14師団高射砲隊に転属。  
44年7月25日、高射砲第116連隊に

転属。  
44年8月23日、暁第2953部隊、船舶砲兵第1連隊に転属。  
44年9月9日、香椎丸に乗船し、宇品出港、釜山へ。  
44年10月3日、宇品出港、上海へ。  
44年10月19日、揚子江冲出発、フィリピンへ。  
44年11月10日、香椎丸、オルモック出港し、爆弾命中し沈没。  
44年11月11日、海防艦第13号艦に転乗、マニラ入港。  
44年11月28日、マニラ駅出発。  
44年11月29日、サンフェルナンド駅着。  
44年12月3日、神州丸便乗。  
44年12月15日、門司港入港。  
44年12月16日、門司港駅出発。  
44年12月16日、門司駅到着、船舶砲兵第1連隊に到着。  
45年1月25日、鹿児島県坊津岬沖海上にて、馬来丸砲兵長として交戦中戦死。  
享年24歳。

きをして下さい。私もきつと邦子ちゃんを淳を護ります。こうして私が入隊する前に邦子ちゃんと二人で松坂屋で買ったアルマイトの万年筆で、あの時買った便箋に私の最後の文を書いてみると、凄しかりし九ヶ月のことが走馬灯の様になります。一月十八日のこと、二人で二階で食事をしたこと、灯火管制の東京駅から満員の二等車で伊勢へ行つたこと、雨の水平寺を上つたこと、山中温泉のことなど次から次へと浮んで来ます。邦子ちゃん、私が、私の心臓が止まるその瞬間迄、私は邦子ちゃんのことを思つてゐるでせう。そして邦子ちゃんの名を呼ぶでせう。[下略]



# 佐々木八郎



1922年（大正11）7月7日生。  
兵庫県出身。  
第一高等学校を経て、42年（昭和17）4月、東京帝国大学経済学部入学。  
43年、古典派経済学の貨幣論に関するレポートを執筆。大塚久雄の指導を受ける。  
43年12月、海軍横須賀第2海兵団に入団。  
44年1月、飛行専修予備学生（14期）に採用される。  
45年4月14日、沖縄海上で神風特別攻撃隊第1昭和隊員として戦死。  
享年22歳。

## 佐々木八郎「おぼえがき」

一九四三年六月五日

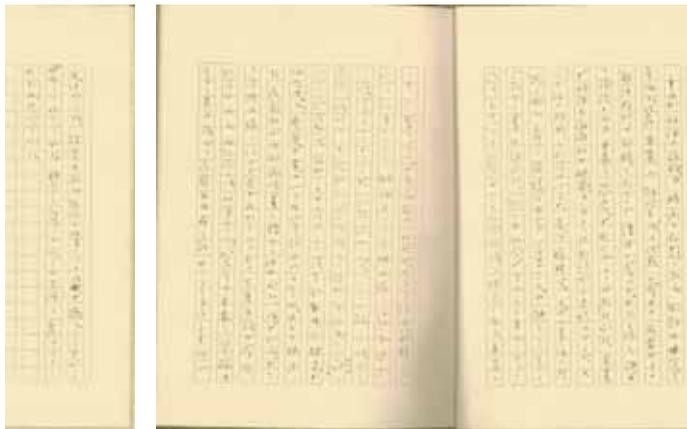
〔上略〕

だが何処までも、僕は正しきもの、ために戦ひたいと思ふ。自分に正しきへ持てば何も恐れるものはない。答だ。自分は自分一個の意地や、独善的な自己満足の為に争ふ事はないつもりである。他人の為に、又世の正しきもの、為に戦ふ限りは何も恐れるものはない。省而直、難千万人我往だ。世の中へ出たと思ふ様にはならん。といふのも極めて出世主義的な考へ方に基いてゐる。自分一個の好惡の感情や意地を通すには窮屈な思ひもするであらうが正しきもの、実現の爲ならば何の懼るゝ事があらう。我々はその崇高な義務と責任に生かされなければならない。大体僕が自分の家の氣風を嫌ひも余りにその出世主義的な明治臭を残してゐる為だ。〔中略〕

一九四三年八月二日

〔上略〕

もはや独伊の敗戦は時間の問題である。問題は資本主義の代表米英と、社会主義の代表ソウイェト両者による戦後歐洲の処理であらう。僕はソウイェトがある限り、朝日（新聞）の論説の如き米英の恣意が行はれるとは思はない。米英が独伊を徹底的に破壊させるとは如何なる方法によるか、又その後の歐洲を如何にするか、甚だ曖昧だ。ナポレオン後の歐



# 原はら 亮あきら



1922年（大正11）8月28日生。  
東京府出身。

40年（昭和15）4月、慶応義塾大学経済学部予科入学。創作活動をはじめ。  
42年10月、慶応義塾大学経済学部進学。  
43年12月、東部第1903部隊に入営。  
44年11月10日、南方総軍司令部付経理部幹部候補生となり、マニラに向けて三池港を出港。  
44年11月12日、東支那海にて乗っていた鳴尾丸が撃沈され戦死。  
享年22歳。

## 原亮『ブートー』一九二三年二月〜三月

〔下略〕

私は何もかも忘れて読書三昧に耽る。と、突然、何のはずみか、戦争、といふことが私の心の静寂を破る。

「今我々の同邦（憲）は戦争をしてゐる。此処も戦場だ。何時敵の飛行機に空襲されるか分らない。死は其処らにうろつてゐるのだ。」〔中略〕

国家から、学校から、召集を受ける時の不愉快な気持ちが少しでもおくれ何時も、舌なめずりをする様に今の瞬間の安らかな気持ちをタンノウする。人は私を罵るかも知れぬ。私を臆（憲）病者と云ふだらう。

私は弾の飛ぶ戦場が恐しい。実に恐しい。だが、私に召集令状が来て、その真只中に立たねばならぬことになつたなら、私は国の為死に死ぬであらう。私は決死隊には進んで参加するであらう。私は今心の中に何一つやましいところはない。私は嘘を云つてはならない。「その時、私は死なう」と私は

云ふことが出来るのだ。

だが、安らかな気持ちで私の生活が続けられることを私は私のぞむ。これも亦実に真実なのだ。私は之を矛盾ではないと確信してゐるのである。〔中略〕戦争は文化を創造する。之は此ういふ時代に好んで使はれる言葉である。然し私はさうは思はない。即ち、戦争は文化を破壊する。破壊の灰燼の中から新文化は芽生へる。

戦争は文化を改新するのである。フランス人は、或は巴里人は花の都の文化を破壊されるのを好まず、取て白旗を掲げた。世人は此れを評して、フランス人は古い文化を惜しむのみで新文化を創造することを知らなかった。と。

巴里人たちはたしかに己が花の文化に対し愛惜の念にたえずして降参したのかもしれない。そして実際にフランス人は新文化を創り出すことが出来なかつたのかもしれない。

然し百年の或はそれ以上の後世人は、巴里人のその処置を軽蔑しつゝ感謝するだらう。〔下略〕



うえはら  
上原  
りようじ  
良司



1922年（大正11）9月17日生。  
長野県出身。  
松本中学校、慶應義塾大学予科を経て、43年（昭和18）10月、同大学経済学部進学。  
43年12月、松本の東部第50部隊に入営。  
44年2月、特別操縦見習士官（2期）に任官、熊谷陸軍飛行学校に入学、相模教育隊に入隊。  
44年3月、館林教育隊に入隊。  
44年7月、熊谷陸軍飛行学校卒業。  
44年8月、西部第123部隊第40教育飛行隊（知覧飛行場）に入隊。  
44年11月、西部第110部隊第11錬成飛行隊（目田原飛行場）に入隊。  
45年2月、陸軍少尉に任官。  
45年4月、第6航空軍明野教導飛行師団飛行第244戦隊に編入。  
45年5月11日、沖縄にて陸軍特別攻撃隊第56振武隊員として戦死。  
享年22歳。

上原良司「所感」 一九四五年五月一日

所感  
栄光ある祖国日本の代表的攻撃隊とも謂ふべき陸軍特別攻撃隊に選ばれ、身の光榮之に過ぐるものなきを痛感致して居ります。  
思へば長き学生時代を通して得た、信念とも申すべき理論万能の道理から考へた場合、これは或は自由主義者と謂はれるかも知れませんが、自由の勝利は明白な事だと思ひます。人間の本性たる自由を減す事は絶対に出来なく、例へそれが抑へられて居る如く見ても、底に於ては常に闘ひつゝ、最後には必ず勝つと云ふ事は、彼のイタリヤのクロチエもつて居る如く真理であると思ひます。権力主義全体主義の国家は一時的に隆盛であらうとも、必ずや最後には敗れる事は明白な事実です。我々はその真理を、今次世界大戦の枢軸国家に於て見る事が出来ると思ひます。ファシズムのイタリヤは如何、ナチズムのドイツ亦、既に敗れ、今や権力主義

国家は、土台石の壊れた建築物の如く次から次へと滅亡しつゝ、あります。真理の普遍さは今、現実には依つて証明されつゝ、過去に於て歴史が示した如く、未来永久に自由の偉大さを証明して行くと思はれます。自己の信念の正しかった事、この事は或は祖国にとつて恐るべき事であるかも知れませんが、吾人にとつては嬉しい限りです。（中略）  
思ふと、死は天国に行く途中でしかありませんから何でもありません。明日は出撃です。過激に互り、勿論発表すべき事ではありませんでしたが、偽はらぬ心境は以上述べた如くです。何も系統だてず思つた儘々雑然と並べた事を許して下さい。明日は自由主義者が一人この世から去つて行きます。彼の後姿は淋しいですが、心中満足で一杯です。  
云ひたい事を云ひたいだけ云ひました。無礼を御許し下さい。ではこの辺で。  
出撃の前夜記す。



たなか  
田中  
敬治



1922年（大正11）9月30日生。  
長野県出身。  
静岡高等学校を経て、1942年（昭和17）10月、  
東京帝国大学法学部入学。  
43年12月10日、舞鶴海兵団入団。  
45年5月4日、沖縄近海にて神風特別攻撃隊琴平  
水心隊員として戦死。享年22歳。

田中実治宛田中敬治軍事郵便葉書

一九四四年八月二六日付

其後皆様お変わりなきこと、存じます。益治もよく勉強してゐること、思ひます。村も学童の疎開で大ひに忙しいこと、存じます。家中のものが代わる／＼正治の所へ便りを出して励してやゝてゐること、思ひます。  
八月も愈々終りと近づき秋もせま／＼参ります。そして又日本にとつても大切な幾月かが頑張つて過ぎればなりません。私も大いに頑張る積りでおります。四国もそう暑くはなく、特に海岸では中々気持がよいであります。長野の山中の様な涼しい風が夜になると吹くときもあります。皆様の御勝健を祈ります。

いしおか  
石岡  
俊蔵



1921年（大正10）2月6日生。  
秋田県出身。  
日本大学文学部2年在学中、  
42年（昭和17）4月1日、陸軍北部第17部隊入營。  
45年1月16日、フィリピンのアムラング海岸にて戦死。  
享年23歳。



石岡豊太郎宛石岡俊蔵軍事郵便葉書

一九四三年五月六日付

暫ばらく失礼致しました。みんな元気との事、何よりです。私も相変わらず元気ですが、色々考へると時々ぼんやりする時が有ります。但し何んか不適な時でも偉大なる笑ひをもつて夫れを見送つて居ります。軍人となつて初めに二十九、三十日は夜の八時迄外出致しましたが、さりとて何も面白い事は有りませんでした。つい先日、写真を取りました。出来次第お送り致します。では何時迄も元気にお務め下さい。都制になるから止めるとは考へるので、お母さんも賛成しないとと思ひます。



# まつおか 松岡 きんぺい 欣平



1923年（大正12）8月10日生。  
富山県出身。  
43年（昭和18）8月、静岡高等学校卒業。同年10月、東京帝国大学経済学部入塾。  
43年12月、東部第48部隊に入隊。  
44年5月、豊橋陸軍第1予備士官学校に入塾。  
44年11月、マレー半島ポートディクソンの南方軍士官学校下士官候補者隊に入隊。  
45年4月、ビルマ方面軍第33師団214連隊に見習士官として配属される。  
45年5月27日、モールメン市外にて戦死。  
享年21歳。

## 松岡欣平『日記』 一九四三年

「無法松の一生」を見た。入管前の心境であつた為か、妙に印象が深い。坂「匠妻の熱演による為か、近来の映画中傑作の一つとして見る事ができた。思ひ出ふかいものとして残るであらう。時代は日清日露の役前後、明治中葉場所は九州小倉の街。時代と場所の選定がよかつたのが成功の因の一つであつたらう。映画は随所にカットがある。松五郎の生涯をうつつ、吉岡夫人に懸想する部分があつてカットされ、松五郎の死ぬ場面がカットされて、将にカットの威力が遺憾なく發揮されてゐる。実に残念な次第だ。運動会、提灯行列、太鼓等々すべて走馬燈の如く走つてゆく。すべてが過去の淡い夢と消えてしまつた。何時の日にか、提灯行列を見る事が出来やう。何時の日にか、運動会の喜びにひたれ得よう。俺は気が狂ひさうだ。俺は太鼓を打つてみたい。俺は提灯行列をやつてみたいのだ。長袖の着物かみたいのだ。戦争々々々々々々、それは現在の自分にとつてあまりにもつよい宿命的な存在なのである。世は將に闇だ。戦争に何の倫理があるのだ。大義の為の戦、大義なんて何だ。痴者の癡言にすぎない。宿命と感ずる以上、自分は戦に出ることは何とも思はない。然しそれで宿命は解決されるのであらうか。世の中は再び平和は取りもどせるのであらうか。自由主義と云ひ、軍国主義統制主義といふ。すべて手段にすぎないのだ。日本は日本のみの道を歩まねばならぬし、歩むのであるのだ。平和の為の戦が戦の目標でなくて何ぞ。果して自由主義の時代であつたかどうか知らぬが、昭和五年頃からの日本といふも

のを知つてゐる。過去がなつかしい。過去の夢を追つてみたい。弱い心の自分は、現実を如何にするかを知らずに過去のはかない夢を追ひ未来の空中樓閣「國」のやうな淡い勝利の夢にふけてゐる。もっと強くなれ。もっと強くなりた。たゞそれだけ。

「無法松の一生」を見た。入管前の心境であつた為か、妙に印象が深い。坂「匠妻の熱演による為か、近来の映画中傑作の一つとして見る事ができた。思ひ出ふかいものとして残るであらう。時代は日清日露の役前後、明治中葉場所は九州小倉の街。時代と場所の選定がよかつたのが成功の因の一つであつたらう。映画は随所にカットがある。松五郎の生涯をうつつ、吉岡夫人に懸想する部分があつてカットされ、松五郎の死ぬ場面がカットされて、将にカットの威力が遺憾なく發揮されてゐる。実に残念な次第だ。運動会、提灯行列、太鼓等々すべて走馬燈の如く走つてゆく。すべてが過去の淡い夢と消えてしまつた。何時の日にか、提灯行列を見る事が出来やう。何時の日にか、運動会の喜びにひたれ得よう。俺は気が狂ひさうだ。俺は太鼓を打つてみたい。俺は提灯行列をやつてみたいのだ。長袖の着物かみたいのだ。戦争々々々々々々、それは現在の自分にとつてあまりにもつよい宿命的な存在なのである。世は將に闇だ。戦争に何の倫理があるのだ。大義の為の戦、大義なんて何だ。痴者の癡言にすぎない。宿命と感ずる以上、自分は戦に出ることは何とも思はない。然しそれで宿命は解決されるのであらうか。世の中は再び平和は取りもどせるのであらうか。自由主義と云ひ、軍国主義統制主義といふ。すべて手段にすぎないのだ。日本は日本のみの道を歩まねばならぬし、歩むのであるのだ。平和の為の戦が戦の目標でなくて何ぞ。果して自由主義の時代であつたかどうか知らぬが、昭和五年頃からの日本といふも

「無法松の一生」を見た。入管前の心境であつた為か、妙に印象が深い。坂「匠妻の熱演による為か、近来の映画中傑作の一つとして見る事ができた。思ひ出ふかいものとして残るであらう。時代は日清日露の役前後、明治中葉場所は九州小倉の街。時代と場所の選定がよかつたのが成功の因の一つであつたらう。映画は随所にカットがある。松五郎の生涯をうつつ、吉岡夫人に懸想する部分があつてカットされ、松五郎の死ぬ場面がカットされて、将にカットの威力が遺憾なく發揮されてゐる。実に残念な次第だ。運動会、提灯行列、太鼓等々すべて走馬燈の如く走つてゆく。すべてが過去の淡い夢と消えてしまつた。何時の日にか、提灯行列を見る事が出来やう。何時の日にか、運動会の喜びにひたれ得よう。俺は気が狂ひさうだ。俺は太鼓を打つてみたい。俺は提灯行列をやつてみたいのだ。長袖の着物かみたいのだ。戦争々々々々々々、それは現在の自分にとつてあまりにもつよい宿命的な存在なのである。世は將に闇だ。戦争に何の倫理があるのだ。大義の為の戦、大義なんて何だ。痴者の癡言にすぎない。宿命と感ずる以上、自分は戦に出ることは何とも思はない。然しそれで宿命は解決されるのであらうか。世の中は再び平和は取りもどせるのであらうか。自由主義と云ひ、軍国主義統制主義といふ。すべて手段にすぎないのだ。日本は日本のみの道を歩まねばならぬし、歩むのであるのだ。平和の為の戦が戦の目標でなくて何ぞ。果して自由主義の時代であつたかどうか知らぬが、昭和五年頃からの日本といふも

「無法松の一生」を見た。入管前の心境であつた為か、妙に印象が深い。坂「匠妻の熱演による為か、近来の映画中傑作の一つとして見る事ができた。思ひ出ふかいものとして残るであらう。時代は日清日露の役前後、明治中葉場所は九州小倉の街。時代と場所の選定がよかつたのが成功の因の一つであつたらう。映画は随所にカットがある。松五郎の生涯をうつつ、吉岡夫人に懸想する部分があつてカットされ、松五郎の死ぬ場面がカットされて、将にカットの威力が遺憾なく發揮されてゐる。実に残念な次第だ。運動会、提灯行列、太鼓等々すべて走馬燈の如く走つてゆく。すべてが過去の淡い夢と消えてしまつた。何時の日にか、提灯行列を見る事が出来やう。何時の日にか、運動会の喜びにひたれ得よう。俺は気が狂ひさうだ。俺は太鼓を打つてみたい。俺は提灯行列をやつてみたいのだ。長袖の着物かみたいのだ。戦争々々々々々々、それは現在の自分にとつてあまりにもつよい宿命的な存在なのである。世は將に闇だ。戦争に何の倫理があるのだ。大義の為の戦、大義なんて何だ。痴者の癡言にすぎない。宿命と感ずる以上、自分は戦に出ることは何とも思はない。然しそれで宿命は解決されるのであらうか。世の中は再び平和は取りもどせるのであらうか。自由主義と云ひ、軍国主義統制主義といふ。すべて手段にすぎないのだ。日本は日本のみの道を歩まねばならぬし、歩むのであるのだ。平和の為の戦が戦の目標でなくて何ぞ。果して自由主義の時代であつたかどうか知らぬが、昭和五年頃からの日本といふも

# いたお 板尾 こういち 興市



1923 (大正12) 10月2日生。  
東京都出身。  
東京商科大学予科を経て、43年 (昭和18) 10月、  
同大学商学部に進学。  
43年12月10日、横須賀の武山海兵団入団。  
45年2月18日、監視艇隊員として本州東方海上  
にて戦死。  
享年27歳。

## 父・板尾藤次郎宛板尾興市書簡

電報で要旨はお解りになったかも知れませんが、此処に改めて今回の学徒徴兵の事について記します。十月二日の緊急勅令で過齢に到せる全学生は十月二十五日より十一月五日迄徴兵検査を受け、十一月一日入営といふことに定まりました。今度は身体不具又は現在疾病のある者以外丙種でも入営することにされたのですから、小生も勿論入りませぬ。法文経の諸科は

の学生は入営延期の筈ですから当分の間入りませぬ。理工科、医科、農科それ故教育は停止されるわけで、この種の学校は以後当分教育は続けられず結果としては廃止の運命です。学校も此の整理統合されるさうですが、吾が商大は如何なるかについての予測は許されませぬ。

以上の通り、吾々は此処二ヶ月足らずの中に文字通りペンを捨て書物を閉じて就をとることになつたのです。この様な処置は大東亜戦争の開始以来、既に時間の問題として考へられてきたものであり、現交戦国の何れもが断行してゐることになるを

思へば来るべきものが来たに過ぎぬのであり、何等大きなショックは身へぬものであります。矢張り一部には予想外に思ひ切つた措置などの感がないわけではありませぬ。発表されたのが九月二十二日、それから一ヶ月、検査、一ヶ月で入営ですから、実に且(即)てなき迅速さであり、小生らとしても折角本科に進んで張り切つて学問に心身を入れたとした矢先です

から、実に残念な次第ですが、日本の直面してゐる現実が如何に切迫してゐるかを感じてゐますから、何とか諦めはつきませぬ。それにしても余りに短い月日しか残されてゐないの、何等今迄の学問への努力をままとめた形で残すことも出来さうになく、読みさし

の本に、しおりをはさんで出掛けねばなりません。家へ帰つてやつと飯田さんの出た後、六畳の部屋に書物を持ち落着いた気持で机の前に坐らんとしたのが十月一日、並んだ書物のどれを見ても読んでゐるのは



極く僅かで無数の宝が眠れる宝庫の中に取り出さるべく、小生の来るのを待つてゐるのを見ると、いさか二ヶ年半の生活の努力の足らなかつたことが身にしみて感じられ、書物にらみつけられてゐる様な氣もして、気分が滅入ります。

再び帰つて書物の前に坐るのは何時の日のことかと考へますと、誠に淋しい次第です。吾々は飽く迄も学生であり、学問を以て自己の生命とし、学を以て國に報ずるの決心誠に固きものがありますが、國家の要請の急なる此の時、幾多の思ひを學と國家の上に

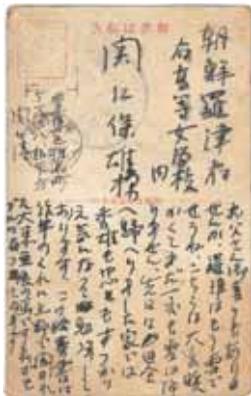
残しながら、國防の第一線に赴かねばならなくなつたのです。法文科の学生はこの戦争時にあたり、自然科学方面の学生と異り用はないから戦線に送られるわけですが、吾々の征く後、國家の運営はなほ、頭の切り換えの絶対望まれぬ老朽政治家や、社会科学方面の知識に乏しく、且つ学問精神の点で貧弱なる技術者達に任かされるわけです。其れ故國家の前途頗る多難なるは予測されます。「下感」

せきぐち きよし  
関口 清



1919年（大正8）2月7日生。  
群馬県出身。  
東京美術学校予科を経て、43年（昭和18）9月、  
同学校油画科卒業。  
43年11月10日、陸軍入營。  
45年8月19日、沖縄・宮古島の第28師団第4野戦  
病院にて戦病死。  
享年26歳。

関口保雄宛関口清葉書 一九四三年二月一日付  
お父さん御変りもありませんか。羅津はもう雪で  
せうね。こちらは大変暖か  
かくてまだ一度も雪は降  
りません。先日は田舎  
へ帰りました。家では  
秀雄も忠もすっかり  
元気になって勉強して  
おります。この絵葉書は  
昨年のおくれに上野で開かれ  
た大東亜展の画です。私がモ  
デルになってゐます。



しらい しげのり  
白井 成徳



1921年（大正10）2月7日生。  
愛知県出身。  
第二高等学校を経て、41年（昭和16）東京帝国  
大学文学部心理学科入学。  
43年9月、東京帝国大学文学部心理学科卒業。  
44年10月、臨時召集により陸軍第六航空教育隊  
第四中隊に入隊。  
46年12月7日、俘虜として抑留中に、ソビエト連  
邦ウズベク共和国タシケントで病死。享年25  
歳。

小田島道子宛白井成徳俘虜用葉書 一九四七年二月一日付  
皆様お元気ですか。  
広島の様子がわかりませんが  
らそちらへあてて出します。  
目下こちらで少し健康を害  
して（三字抹消）生活をして居ますから  
心配する事はありません。  
皆の字が見たいから沢山書い  
て下さい。  
求道学会はどうなつたでせうか。  
東大の心理学研究室にも  
知らせて下さい。  
帰ったら又勉強したいと思っ  
てます。  
皆元気で待つて居て下さい。



きけわだつみのこえ

# 日本戦歿学生の手記

序文 渡辺一夫・解説 小田切 秀雄

初版たちまち売切れ

再版成る!!

B6.350頁  
¥.200円

東京大学協同組合出版部



「きけわだつみのこえ」初版は1949年10月20日。この広告にある「再版」とは同年11月22日。翌年1月30日に3版、3月31日に4版。挿絵は戦没画学生関口清さんの自画像

# 松永 茂雄

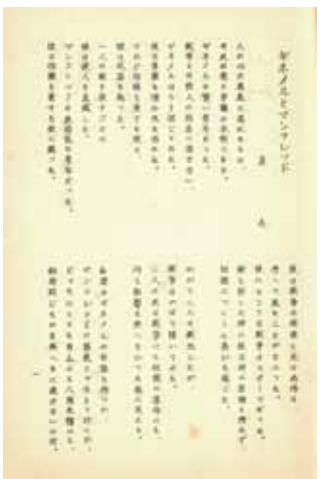


まつなが しげお  
 1913年（大正2）4月30日生。  
 東京府出身。  
 31年（昭和6）4月第一高等学校入学。  
 32年第一高等学校中退。  
 34年1月現役兵として陸軍歩兵第一連隊に入營。  
 35年除隊。私立花園学園小学部に勤務し児童教育にあたる。並行して文芸同人誌『ゆめみこ』を36年4月までに8冊刊行、劇作・詩・エッセイ・歌論を執筆。  
 36年4月国学院大学予科に入学。  
 37年10月応召。11月上海派遣軍飯塚部隊高見部隊上野隊に配属。  
 38年11月28日上海の呉淞陸軍病院にて戦病死。享年25歳。  
 40年5月15日遺稿集『学徒兵の手記』刊行。

## 松永茂雄「ギネメルとマンフレッド」

人の心の奥底に流れるもの、それは愛と争闘の本能である。ギネメルは賢い青年だった。戦争とは殺人の別名に過ぎない、ギネメルはさう信じてみた。彼は争闘を憎み死を恐れた。けれど祖国を愛する故に、彼は武器を執った。一人の敵を殺すことに彼は殺人を意識した。マンフレッドは無邪気な青年だった。彼は祖国を愛する故に戦った。彼は戦争の悲惨も死の恐怖も考へて見たことがなかった。彼にとっては戦争はスポーツだった。敵を殺した時に彼は何の苦悩も持たず、祖国につくした喜びを感じた。やがて二人は戦死したが、

戦争はやはり続いてみた。二人の死は戦争にも祖国の運命にも、何も影響を与へなかつた様に見える。私達はギネメルの苦悩を持つか、マンフレッドの陽気さで生きて行くか、どっちにしても自分にも人間全体にも、結局同じものを与へるに過ぎないのだ。



# 柳田 陽一



やなぎた よういち  
 1919年（大正8）3月5日生。  
 岡山県出身。  
 台北州立台北第一中学校、台湾総督府台北高等学校を経て、  
 39年（昭和14）4月、京都帝国大学文学部史学科入学。  
 41年12月、京都帝国大学文学部東洋史専攻卒業、大学院に進学。  
 42年2月、陸軍東部第78部隊に入營。  
 42年10月1日、千葉県木更津にて事故により遭難殉職。享年23歳。

## 柳田陽一「日記」一九三八年

自由の問題を終る。全体に依存しつつ個体として生きる。これこそ我々「全体主義と自由主義」の問題に當つて考へなければならぬことであらう。全体全体といって個人を没却するやうなことは絶対にあつてはならない。今の國家の上になつては自由主義を利己主義とはきちがへてゐるやうである。  
 （一九三八年六月一七日）



# 松永 龍樹



1916年（大正5）8月22日生。  
 東京府出身。  
 38年昭和13）4月、国学院大学文学部国文科入学、  
 41年4月卒業。  
 42年2月応召、陸軍に入隊。  
 44年5月28日、中国河南省魯山付近の戦闘で戦死。  
 享年27歳。

## 松永龍樹「感想 月見草」

——（出家とその弟子をよんで）——

1 出家とその弟子をよんで——

心の和やかさを得ました。  
 迷って居る時、心の落ちつかない時、読まねばなりませんでしたが、初めは気が進まなかったのですが、終には或光明を与へられました。

すべてを解決し感動を与へるには足りないけれどすべての世界を一つに和めてしまふはらかな気分が最も大切なものでした。

作者の軽やかな達観した自信の思想。

悪い感化・影響を与へるべきものをまたない誰にでもよめる作品。

悩みに悩む人の心を淡く上からしかも深くとらへて居ます。

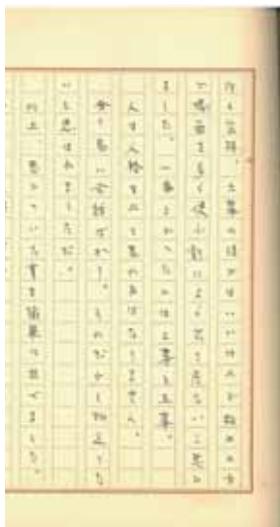
序曲と一幕は未だ非常に不自然。二幕もさうした感じがある様。三、四・五幕と段々上つて

行く気持。六幕の結びはいいけれど始めの方で場面を多く使ふ割によく出て居ないと思ひました。一番よかったのは三幕と五幕。

人は人格を以て表れねばなりません。

分り易い会話ばかり。それが少し物足りないと思はれましたが。

以上、思ひついた事を簡単に述べました。



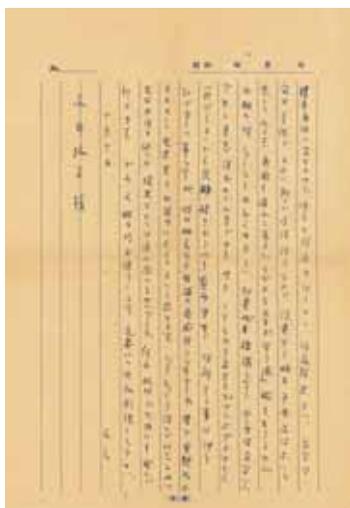
おぐら  
まさひさ  
小倉正久



1918年（大正7）生。  
茨城県出身。  
明治学院を経て、43年（昭和18）3月、中央大学  
法学部卒業。  
43年10月、大刀洗陸軍航空学校の分校、群馬教  
育隊に入営。  
44年7月30日、北京郊外の飛行場で訓練中殉職。  
享年25歳

小倉正久書簡 永井拓子宛 一九四三年一月一日付

前途に対する見通しが益々困難なるにつれて、且社会機構の変化の国民に及ぼす影響、それに対する国民の生活不安等、余程の信念がないと生き抜いて統後を守り通す事は困難でせう。超高度資本主義国家として、我が国が発展するにしても、これまではらんでゐた諸矛盾の解決のため、相当苦勞するでせう。又その矛盾が長期戦と共に露呈して現在の日本の生産力が危機にあるのだが。もう休暇も終へて、学校も始まつた事でせう。然し何かしら、一抹の不安があるでせう。これから勉強する事は仲々難しくなるでせう。然し、男が戦線に全部に出動して行く現在、文化の保持も女性に責がかつて来る事でせう。今自分の感じてゐる事は健全な肉體と強固な体力が、一等貴重だと思つてゐます。イデオロキに於てはパトリオテック（愛國的）なパトスを持つてゐるが、その実践となると、体力が強くないと駄目だ、と痛感してゐます。今日は入校以来第二回目の日曜日です。精々身体に氣をつけて、体力の増進を計りつつ、御勉強なさい。自分は毎日多忙で、それに新しい学課評りなので、読書する暇も孕業迄はないと思つてゐます。新聞も遅れて来るし、ラヂオもあるが余り聞く暇もありません。お暇の時、ニュースをお知らせ下さい。封書でも結構です。今度は自分一人で（ブルクス『資本論』）第三巻まで読むので大変でせう。時々こちらから氣合を掛けて上げますから、



一回でもよいから読破されるやう望みます。理解する事は仲々むづかしい事ですが、特に抽象的な理論の展開評りですすからね。後で実証的なものとして発達史（野呂栄太郎『日本資本主義発達史』）をお読みになるとよいと思ひます。でもゆっくり読んでいらっしやい。先日お話を伺つた従兄さんとは遂に会へませんでした。何れ航性で大邱にも飛んで行きます。でわ又暇の時お便りします。走書にて失礼 判読して下さい。

永井拓子様  
十月十日

正久

うえむら  
上村  
げんた  
元太



1921年（大正10）1月1日生。  
三重県出身。  
少年時代を埼玉県大宮で過ごす  
42年（昭和17）、中央大学専門部法科卒業、中  
央大学経済学部入学。  
43年1月10日、陸軍中部第38部隊入營。  
45年4月21日、沖縄本島宜野湾方面戦におい  
て戦死。  
享年24歳。



上村元太 「聖戦日記」

「生きて帰る」  
俺にはまだまだ山ほど人生

がある。いや俺ばかりではない。

生きとし、生けるものすべて

だ。それがみんな死の中で育

ち、ほんものの死へ這入っていか

なくてはならぬとは。

「生ける屍」キザな言葉だが、

この凡そ未来と希

望をなげうってゐる

言葉に、

真実性があるのだら

う。

赤紙を受けとった後

の俺がいまだに死を

怖れ生活をおほいす

るのは、

莫迦げ切った話なの

か。

墓の下に埋められた

男が、もう一度暖い

飯を喰ってみたい

と思ふのと同じなのか、

えい、さう思はなくは

ならぬとは。

「戦争」  
ゲーテの  
ファウストは、

「ああ又戦さか、これは知  
者の聞くを好まぬ言葉だ」  
といふが、

われわれにとっては聞くを好まぬで

すむ処か、肉体だけを無料で

提供するにとまらず、

かんじんの人間そのものをもぎと

らしてやるのだ。

しかもわれわれの生命の間は

この戦さが終るとは

思はれない。

昔ならば、山へ這入り

きる事も寺の坊主にな

って終ふ事も可能で

あったらう。

いな今それがゆるされた

なら日本中の寺山は

超満員で却って逆

になってゐるかも知れない。

生と死

人間と生活

われらと戦さ

この相反するものが

現在にあっては殆んど

一緒くたにされてしまつて

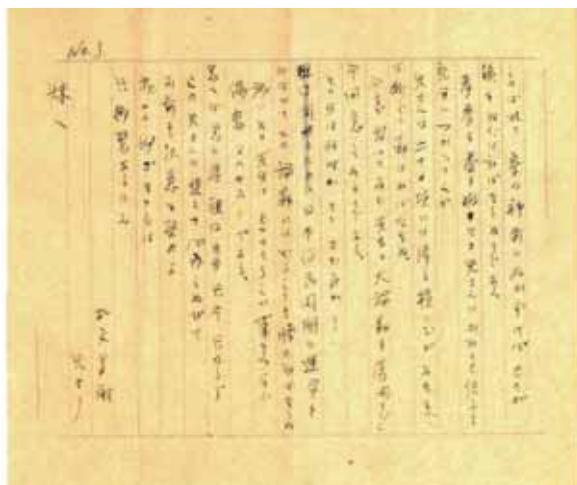
ゐるのだ。

しかも尚俺は生きて  
みたがってゐるとは。

おくむら  
奥村  
かつろう  
克郎



1921年（大正10）1月10日生。  
岐阜県出身。  
41年（昭和16）、浜松高等工業学校機械科卒業。  
42年1月、陸軍中部第13部隊に入營。  
44年9月30日、マリアナ諸島のグアム島にて戦死。  
享年23歳。



奥村克郎書簡 奥村信子宛

一九四二年三月一〇日付

信子よ

支那事変は全く国民の意志以下に転落してしまった。地下に眠るみ霊の心の中

や如何！（中略）

現代の文部省は青年を指導する点に於ては凡そ無力である。

そして彼等の思想は無思想と云ふべく、あり得べくんばまさに反国体、なまいきせんばんなやつばらである。

このしこばら打ち捨てざれば

日本は救ふべくして救はれないと確信してゐる。兄さんは戦の決意にもえ立上。

祖国永久生命に密接してゐるのである。（中略）

今まで習つてゐた先生と大論戦を展開すべく今用意してゐるのである。

その日は何時か？ 生か死か？

日本国民同胞の運命を

になひてこの論戦にはどうしても勝たねばならぬ。

誠にその先生はもつともらしい事のみ云ふ。

偽表アルキストである。

思へば思ふ程 祖国日本 只今 只ならず

この兄さんの悲しき心しめびて

お前も決意を堅めよ

我々の仰ぎまつるは

只御製あるのみ

乱筆多謝

兄より

妹へ

よしむら  
ともお  
**吉村 友男**



1922年（大正11）3月1日生。  
岐阜県出身。  
早稲田大学第二高等学院を経て、42年（昭和17）  
10月、早稲田大学文学部国文科進学。  
43年12月1日、陸軍入營。  
44年10月18日、フィリピン西方海上にて戦死。  
享年22歳。

吉村友男 次姉・なほ宛書簡

無事、帰宅申し候。御安心下されたく候。  
東海道上下何十回に及び候へども、今たびほど美しき夕焼け  
富士は稀有のことに候ひき。  
友吉（友男のペンネーム）少々ゑんぎをかつき申し候。ゑんぎと  
言へば、期待しをりしミカン、一箇も売りおらず  
残念至極に候ひしが、これはまた、とびきりゑんぎ上々の事に  
候。と申すは、ミカンはこれ、  
未選（ミカン）に通じ、よくない事に候へばなり。  
富士（不惑）は見事に見え申し、ミカン（米選）は一つもこれ  
無きとは、何たる上ゑんぎに  
候か！お察し願ひたく候。  
さて、いよいよ、十二月一日、岐阜連隊へ入隊と決定申し候。  
歩兵に候。着々準備とののへ  
をり候。御安心下されたく候。  
みんな元気にて、おばあさんもホータイもとれ、とても元氣  
におなりになり申し候。アンマ  
にもんでもらへば、うでは動くやうになるさうに候。  
とし姉も昨日より出陣なされ候。  
では、けふはこれだけで失礼申し候。  
在京中の御せわ、あつく御礼申し上げ候。  
友吉  
なほ姉様



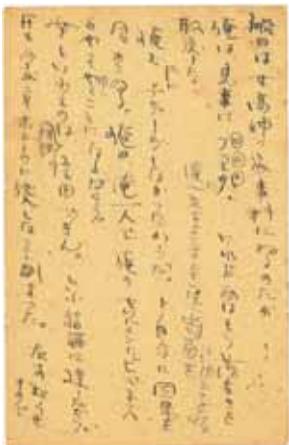
はせがわ  
しん  
**長谷川 信**



1922年（大正11）4月12日生。  
福島県出身。  
42年（昭和17）年、明治学院高等部入学。  
43年12月1日、陸軍に入營。  
45年4月12日、沖縄海上にて特別攻撃隊武陽隊  
員として戦死。  
享年23歳。

長谷川信葉書 渡部亨宛 一九四一年七月七日付

船田は女教師の家事科にゐるのだが：  
俺は、見事にフラレタ。けれど、今はもう落着きを  
取戻した。俺に文をよこすときは封筒を用ひてくれ。  
俺がFにデザイヴしなかつたからだ。と自分に因果を  
含めてゐる。俺は俺一人で、俺のセツルメントビジネス  
をやつてゆくことになるだらう。  
女といふものは所詮信用でせん。といふ結論に達したから、  
Fも今度こそホントウに他人となつてしまつた。右お知らせ  
まで。



やま  
ずみ  
あきら  
山隅 観



1923年（大正12）3月15日生。  
広島県出身。  
広島第一中学校、広島高等学校を経て、  
42年（昭和17）10月、東京帝国大学文学部国文  
科入学。  
43年12月1日、陸軍西部第5部隊入營。  
45年8月12日、中国河南省密県季堂村付近で戦  
死。  
享年22歳。

山隅観「一九三七新日記」一九三八年一月一日〜一九四二年六月一九日

「最敬礼」。頭を上げた。白い布を首にかけ原隊の迎へに行つたらしい兵士が二つつの遺骨を首からたらしてだきしめるやうにかがみこしになつて又泣きたいのを噛みこらへるやうな悲痛な面持である。襟には50と記してあつた。何んと言ふ多数の戦死者だらう。百余名の者であつた。次に15戦といふ襟しよのやはり歩兵であつて百余名の灰があつた。

そして遺骨を持った数十人の兵士の足音はチャツチャツと言ふやうに響いた。そのあとをがちがちと言ふ足音を立てて僧侶、婦人会員等が過ぎて行つた。

あの箱に導い英霊の体の一部分がある。その兵士は元気な又勇敢な、はた又この自分のこの肉のやうに生命を持った身体を有してゐたであらう。しかし私は以前在広師団の遺骨を見てゐたのと、知つてゐる人のない為か、あまりにも変りはててゐる為かそれがひどく悲しくは思へなかつた。それが戦死者であるとは中々信じ難かつた。字品の取にその遺骨を送る為に行列のあとをついて行きつつそれを信じてることにつとめた。

（遺骨凱旋）一九三七年二月日



鷺尾 克巳 わしお かつみ



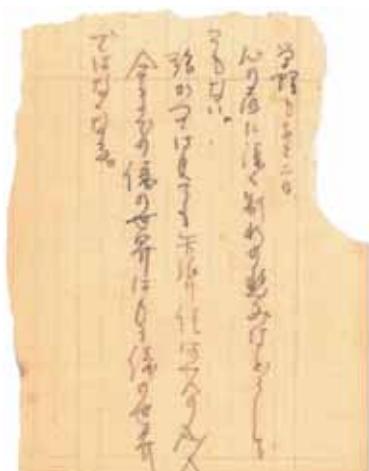
1923年（大正12）4月19日生。  
兵庫県出身。  
兵庫県立第一神戸中学校を経て、42年（昭和17）4月、第一高等学校文科甲類に入学。  
43年12月、陸軍中部第52部隊に入隊。  
44年2月、特別操縦見習士官（2期）に任官、熊谷陸軍飛行学校に入学、相模教育隊に入隊。  
44年3月、児玉教育隊に入隊。  
44年7月、熊谷陸軍飛行学校卒業。  
44年8月、西部第123部隊第40教育飛行隊（知覧飛行場）に入隊。  
44年11月、西部第110部隊第11練成飛行隊（目田原飛行場）に入隊。  
45年2月、陸軍少尉に任官。  
45年4月、第6航空軍明野教導飛行師団飛行第244戦隊に編入。  
45年5月11日、沖縄にて陸軍特別攻撃隊第56振武隊員として戦死。  
享年22歳。

鷺尾克巳『日記ノート』に挟まれていた紙片

学帽もあと二日

心の底に湧く別れの悲みはどうしようもない。

強がっては見ても矢張り俺は一人の凡人  
今までの俺の世界はもう俺の世界  
ではなくなる。



稲垣 光夫 いながき みつお



1924年（大正13）3月12日生。  
東京都出身。  
東京高等学校を経て、43年（昭和18）10月、東京帝国大学法学部入学。  
44年10月、海軍経理学校入校。  
47年6月22日、国立沼津病院にて死亡。  
享年23歳。

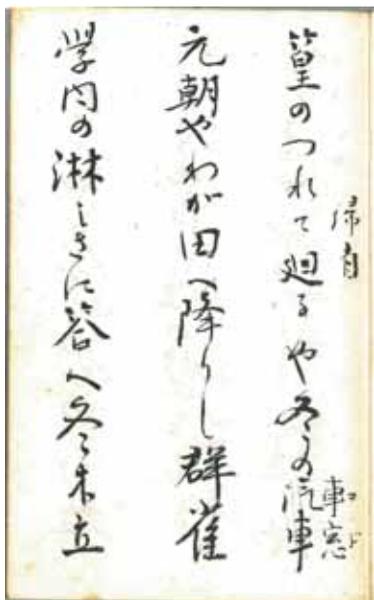
稲垣光夫和綴じ句集

帰省

篋のつれて廻るや冬の車窓

元朝やわが田へ降りし群雀

学問の淋しさに答へ冬木立



# いわがやじろく 岩ヶ谷治祿



1923年（大正12）5月1日生。  
静岡県出身。  
41年（昭和16）4月、静岡第一師範学校入学。43年9月卒業。  
44年3月10日、陸軍入営。  
44年12月23日、フィリピンのルソン島沖にて沈没戦死。  
享年21歳。



## 岩ヶ谷治祿『日記』一九四三年一月一日〜二月三日

三月十日入隊する。それも毎日毎日近くなつて来る。今日はプーゲルビル島附近の大戦果が新聞に乗って来た。大型輸送船大破とか、巡洋艦撃沈とか。

あの大洋に何故海のみずにのまれて、死んで行かなければならぬか。

日本人の死は日本人だけが悲しむ。西洋人の死は西洋人のみが悲しむ。之はどうして、又こうならなければならぬのであらうか。

何故人間は人間で共に悲しみ喜ばねばならぬ様にならぬのではないか。

平和を愛する人。私の様に意久地のないものにはこんな事が痛切に感じられてならぬ。

西洋人である故にその死を日本人が笑つて見る。之は考へても考へても解らない。日本人は「御民われ。いけるしるしあり」とほこりを感じてゐる。西洋人の生のほこりはさて何であらうかしら。海の中で三日、四日と泳いで力つきて死ぬ人のあわれさ。

然かも何も考へずに唯あせてあせて心臓がとまってしまふ様になつて、御仏の姿も見ることが出来ず、死んで行くとは実に悲しい極みであらう。

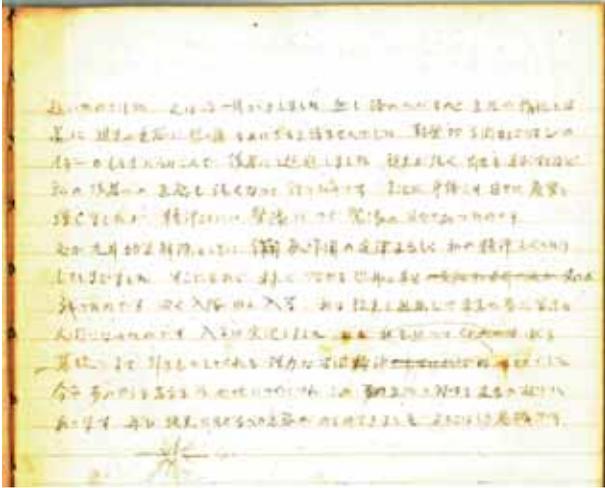
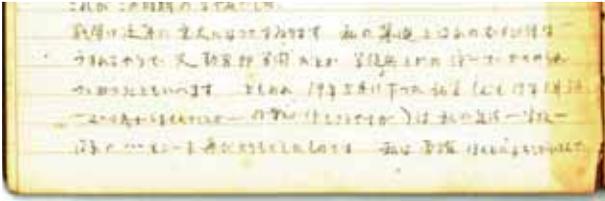
死は誰にもある事だ。まるで今生あるものが無意識でこの世の中に出た様な死が。私が海での死は私にとって無意識の死であるか解らない。

（一九四三年二月六日）

やまね  
山根  
あきら  
明



1924年（大正13）11月21日生。  
京都府出身。  
京都市修道尋常小学校、京都府立京都第一中学校、第三高等学校を経て、  
44年（昭和19）10月、東京帝国大学文学部社会学科入学。  
44年12月17日、陸軍入營。  
45年7月8日、中国の湖南省長沙の陸軍病院にて戦病死。  
享年20歳。



山根明『東都遊学備忘録』 1944年9月28日～11月25日

戦局は次第に重大になってまゐります。私の基礎と国家のむすび付はうすれるやうで、又勤労即学問だとか、学徒兵とかのイデーで、からめられつゝあったともいへます。ともあれ19年5月に下った動員（尤も19年1月3月一之には参加しませんでしたが一のアルバイトもさうですが）は私の生活—学校—国家のハーモニーを再びともどしたものです。私は勇躍、ほんどによるこひいさんと赴いたのでした。之は約一月つゞきました。然し体のへばると生活の惰性とは遂に現実の重圧に悲鳴をあげざるを得ませんでした。勤労即学問なるゴリオンのイデーのもろさにつこんで、後者に逃避しました。現実が強く前者を要求するほど私の後者への意欲も強くなって行つたのです。まことに身体こそ日々に疲労を増しましたが、精神的には緊張につゝ緊張の日々であつたのです。処が九月動員解除と、ともに、作用反作用の定律よろしく、私の精神もぐったりしてしまいました。そこにはたゞ未来につながる恐怖と希望だけが残つたのです。曰く入隊、曰く入学、私は現実を遊離して、未来の夢に生きる人間になつたのです。入学は実現しました。だが私を基礎にまで引きもどしてくれる強力なる学問的精神は、私を迎へてくれませんでした。今や夢のやうな東京生活が地につくにつれ、この生活に対する反省が起りつゝあります。再び現実にもどるべき意欲がめがめてきました。よろこばしき危機です。